

関西学院大学 研究成果報告

2020年 5月30日

関西学院大学 学長殿

所属： 商学部
職名： 教授
氏名： 梅咲 敦子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	コーパスを活用した言語使用メカニズムの解明をめざす英語定型句の研究と教育
研究実施場所	関西学院大学
研究期間	2019年9月20日～2020年3月31日（秋学期）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本年度も言語使用メカニズムの解明を究極的目標として、人が言語を使用する際には、経験から蓄積した定型句やパターンを組み合わせて言葉にしていることを既存の英語大規模オンラインコーパスを用いて実証的に調査した。

本年度は、まず、here's hoping it's soonの例に見られるhere's hopingという一見文法規則に合致しない語の組合せを取り上げて、here's Ving構文（パターン）を調べた。既存の大規模汎用コーパスに現れる用例の共時的・通時的分析を通して、V（動詞）の種類、構文の意味機能と構造および発達過程を調べた。その結果・考察は、「Here's hopingの使用と機能—コーパスに基づく言語の定型性の研究—」『商學論究』67(4) pp. 19-51（2019年3月）にまとめた。

主たる結果として、第一に、調査した全12コーパス（総語数約57.6億語）におけるhere's hopingの出現回数5368回に対しhere is hopingは91回と、通常とは異なり、縮約形の使用が極端に多くみられた。第二に、here's Ving構文においては、Vingの大半がhopingであり、それ以外ではwishingとlooking (at you)にほぼ限定されている。第三にhere's hopingの後続形式はthat節4409回、後続形式なし640回、for+名詞句289回に対し、通常は使用の多いto不定詞が僅か8回と、後続形式にも偏りがあることが分った。これらの結果から、here's hoping (that)は、定型表現と言える主張した。

同時に、OEDに乾杯時の決まり文句と記述されているhere's hopingやhere's looking (at

you)が、現代では乾杯時以外に使用されるようになってきていること、およびその経緯を、質的量的に分析した。成果として、第一に、同じhere's Ving構文でもhere's hopingとhere's looking at youは発達過程が異なる。Here's hopingは乾杯時の使用から、近年はブログでひいきのプロスポーツチームへ祈りに似た強い願望を伝える際に高頻度の使用が見られるようになった。他方、here's looking at youは、基本的に乾杯時の使用が主であるが、別れ際に「君をずっとみているよ」と伝えたり、映画『カサブランカ』の大ヒットに合わせて、同映画を引用したり、援用したりした使用例が増加した。

構文と意味を考えると、here's Vingは、形式としてhere is NP (NPが主語)が存在し、Vingは名詞の機能も持つため、here's Ving構文は、SVの倒置構文として容認しやすいと言えるのではないかと。さらに、here's hopingはI hopeやI am hopingの意味機能を、ブログのような不特定多数とのやり取りでは、発話に一定の客観性を持たせつつ、本来の乾杯時の祈りに近い強い願望を示す恰好の表現といえるのではないかと。すなわち、here's hopingは構造と意味機能の融合が起こった結果として生じた定型表現と説明できよう。

さらに、調査対象をhere is / here's + Ving /to Ving /to Vに広げている。結果の詳細は、「構文の定型性と意味機能の拡張—here'sとhere isに後続するVing, to Ving, to Vを例に」と題して、『関西語法文法研究会20周年記念論文集』（仮題）（開拓社、2020年10月刊行予定）に印刷中である。

その結果の概要は、here's to Vingはhere's toに代名詞や名詞（句）が後続して「～に乾杯」を表す表現に相当し、乾杯時でなくても、祈りを明確に想起させたり、聞き手（読み手）に対する強い訴えや嘆願の機能を果たしたりしていることが分った。また、嘆願や訴えの内容がto以下に示されるためと考えられるが、to Vingの場合はhere's Vingほど語彙動詞に偏りがなかった。従って、定型性はhere's hopingほど強くないが、here's to Vingの形式として「～しますように」を示す強い願望伝達表現といえよう。

他方、here BE to Vの場合、be動詞の非縮約形にはto不定詞部に受動形またはbe動詞が用いられており、逆に、be動詞の縮約形とto不定詞部の受動形が結びつく例は1つも見られなかった。過去分詞にはfound, seen, notedが多く見られた。この結果から、構造は「ここにXがある」の主語動詞倒置構文に「予定・運命・義務・可能性」などを表すbe toが付いた形式here + is/are/was/ were + to be pp + NPで、意味機能は、事物への着目と結束性、断定回避、客観性を示す。従って、here BE to Vは、複数の文法形式と語の組合せに一定の結合が見られるが、まとまりとしての定型性は弱いと言える。

これらの結果から、定型度は、頻度、語連鎖の自由度、歴史的発達過程を尺度に説明が可能であることを指摘した。詳細な本分析は、次年度に継続する。

尚、本調査には、コーパスとして、Sketch Engineで検索可能なコーパス、BYU-Corpora (Brigham Young University, Mark Davies氏の開発ソフトで検索可能なコーパス) およびSCN (小学館コーパスネットワーク) で検索できるコーパス計12種類における用例を全て抽出し、手作業で当該例のみを抜き出した。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。